

19世紀後半におけるワーグナー協会の活動 その文化的、社会・政治的意味

高 野 茂

R. Wagner-Society in the Second Half of the 19th Century,
in Cultural and Sociopolitical Context

Shigeru TAKANO

Summary

The special form of the reception of R. Wagner's music dramas and not least his art philosophy is often called "Wagnerism". This was constructed throughout the second half of the 19th century, along with the development of the Wagner-societies, which had been organized spontaneously by the Wagner-enthusiasts. They have set themselves the goal of understanding Wagner's music-dramas better and supporting the (forthcoming) "Bayreuth festival" financially. The societies should be soon loosely bound together by the "Bayreuther Patronatverein" (1876-) and then by the "Allgemeiner Richard Wagner-Verein" (1883-). But there developed a lot of conflicts of opinions between the societies and the Bayreuth's side (Wagner's intimate supporters or followers): while these were going in the nationalistic and the anti-Semitic direction, in order to promote Wagner's art movement, those generally maintained their basic unpolitical principle, showed in the case of the "Wiener Akademischer Richard Wagner-Verein".

1. ワーグナー受容とワーグナー協会

ワーグナーはその音楽作品と著作によって、音楽分野のみならず文化一般や政治・社会領域でも熱心な論議の対象となり、支持者と敵対者のはげしい論争や対立さえひきおこした、音楽家としては稀にみる存在である。こうしたワーグナーに特有の受容のあり方を、一般にワグネリズム (Wagnerism) の語で呼ぶことが多い。ワーグナーの音楽作品や著作は、彼が生きている間でさえ、時として作者本人の意図とは無関係に取りざたされ、勝手な解釈のもとに独り歩きしていた観があるが、彼の死後はその傾向がいっそう強まっていく。もちろんワーグナー本人の考えや作品の中にワグネリズムの展開の元があったのではあるが、彼の死後、彼の作品のバイロイトによる独占上演が主張され、ワグネリアンの一部は偏狭なドイツ民族主義／反ユダヤ主義の方向に進み、最後にはワーグナーの芸術がナチスのプロパガンダとしての役割を

はたすことになったことはよく知られている。興味深いことに、ワグネリズムの関心は、ワーグナーの音楽そのものよりも思弁的な（劇）音楽論、文化論、政治・社会論、宗教論などに向けられることが多く、支持者、対立者を問わず彼の音楽は聴いたこともない者もめずらしくはなかったという¹。

こうしたワーグナー受容の中核となったのが、「ワーグナー協会」と呼ばれる組織である。ワーグナー協会といっても、ワーグナーの身内や身近な追随者たちの活動の拠点となった中央のワーグナー協会のほか、それに一応統括されながらも、各都市や各地方にはさまざまな規模のワーグナー協会がつくられた。それらの構成員、場所、歴史的経緯などはさまざまであり、ワーグナー協会の性格はけっして一様ではない。

こうしたワーグナー協会の実態については、欧米では近年多くの研究が出されるようになった。わが国ではワーグナー研究がさかんで、音楽の研究者ばかりでなく、（ドイツ）文学の研究者、評論家、作家などがワーグナーについて様々な研究や評論、エッセイなどを出している。しかしワーグナー受容にとって重要な社会組織であるワーグナー協会は、わが国ではこれまでのところほとんど研究の対象となっていなかった。したがって、欧米で出された研究や資料をもとに、いちどワーグナー協회를めぐる複雑な状況を把握し整理して、それらがその時代の文化や政治・社会のなかでどのような性格の団体としていかなる活動をおこなったかをまとめておく必要があると思われる。といっても、この小論ではその全容をとらえることは到底できないことから、この問題を主として19世紀後半のドイツとオーストリアに限定して、ワーグナーの後半生と死後20年ほどにわたるドイツ語圏におけるワーグナー協会について考察することとした。

2. 「反近代」とワグネリズム

ドイツとオーストリアでは、一九世紀後半になると産業革命によって生産性が向上し、産業発展に適した社会体制が整備され、政治においては自由主義が優勢となった。しかし他方で、そうした経済発展にともなう社会の近代化・合理化、また科学の発達による唯物論的世界観の蔓延と宗教の衰退といった急激な社会的、精神的変化は、人々に強い危機感をあたえ、政治的にも文化的にも批判的な反作用をもたらすこととなった。こうした近代化に対する批判感情は、ドイツ帝国建国を機に新たな盛り上がりを見せるドイツ民族主義と反響しあい、ひとつの方向性をもった政治的、文化的思潮へと収束していく。そうした思潮に最初から能動的に関わり、多様な国民層から強い共感を得たのが、ワーグナーの芸術と思想であった。

ワーグナーの文化的、政治的考えの変化は、大きくみて時代のそれを代弁している。若い頃、音楽（オペラ）の分野でも政治の分野でも自由主義的な革命家として活動したワーグナーは、ドイツ帝国建国を機に自分の芸術がドイツ精神を代表するものだというアピールをさかんに行うようになり、音楽上の革新を実現するための新しい劇場の理念をドイツ精神の居城という理念に転化させていく。以前からもっていたユダヤ人に対する悪感情は、そこに世の新しい人種の反ユダヤ主義の影響も加わって、ドイツ精神を頹廃させる毒として意味付けられる。自由主義と革新の精神は、むしろ精神的荒廃をもたらす「近代化」ととらえられ、文化的根底を欠いた模倣や飽くことのない利潤追求を旨とするユダヤ人像と重ね合わされる。晩年の楽劇《パルジファル》と著作『宗教と芸術』は、当時の一般的思潮としての反近代を人間存在の奥底から意味付け支えるパラダイムを提供する結果となった²。

しかしながら、この時代を特徴付ける「反近代」、「ドイツ民族主義」等の概念がきわめて多義的であるように、この時代の「ワグネリズム」の内容も多種多様である。

Nationalism, Nationalismus 等の訳語である「民族主義」は、その意味する内容によっては「国民主義」、

「国家主義」、「国粹主義」とした方が適切である場合がある。ドイツ語ではこの時代の「ドイツ民族主義」運動を“Völkische Bewegung”と呼んでいる³が、ここで使われている“Volk”の語そのものが多くの意味内容をもっている⁴。この時代のオーストリア（ウィーン）におけるペルナーシュトルファー・サークル⁵に関する McGrath の研究書のタイトル“Dionysian art and populist politics in Austria”の中の“populist”の語は、著者自身によれば“völkisch”の英訳であって、この時代のオーストリア政治は、さまざまな意味を併せ持つ“Volk”をキーワードに展開したのである⁶。

このペルナーシュトルファー・サークルの精神的支柱はニーチェの思想であり、またワーグナーの芸術と思想であった。このサークルは志を同じくする友人仲間の集まりで、まとまった組織をつくっていたわけではない。後述するように、このサークルの若い知識人たちの多くはウィーンのワーグナー協会（Wiener Akademischer Wagner-Verein、以下 WAWV と略記）の会員でもあった。この協会は各地域のワーグナー協会のなかでも最も古いものの一つであり、ワーグナー受容において重要な役割を果たしたが、こうしたワーグナー協会こそこの時代のワグネリズムの実体を反映した組織として、ワグネリズム研究の重要な対象となりうるものである。

3. ワーグナー協会設立の経緯

ヴェルサイユ宮殿でプロイセン国王が新しいドイツ帝国の皇帝として戴冠した1871年は、ワーグナーの芸術活動にとってひとつの転機となった年である。普仏戦争の勝利をたたえて、彼はこの年のはじめ、ビスマルクに「パリに迫るドイツ軍に寄せて An das deutsche Heer vor Paris」と題する詩を贈り、また新しいドイツ皇帝のために《皇帝行進曲》を作曲して、ベルリンでの演奏会でこれを御前演奏した⁷。ワーグナーはドイツ帝国建国を、人間精神の頹廃に対する健全で高貴な精神性（＝ドイツ精神）の勝利ととらえ、自己の芸術をそうした「ドイツ精神」の象徴と考えた。そして以前からあためてきた祝祭劇場建設とそこの音楽祭をいよいよ現実のものとするべく行動をおこす。ワーグナー愛好家たちに向けておこなった資金支援のアピール⁸がそれである。唯一この呼びかけに反応して、ワーグナーに「ワーグナー協会」の設立をもちかけたのは、これまでワーグナーとは面識もなかったマンハイムの楽譜商ヘッケルである。この年のうちに彼が当地につくったものが、最初のワーグナー協会となった。その例にならって、翌年には早くも後のワグネリズムの重要な拠点となるウィーンとベルリンにワーグナー協会が設立されているし、そのほかミュンヘン、ケルン、フランクフルト、ライプツィヒ、マールブルクなどにワーグナー協会がつくられていく。

ワーグナーはピアニストのカール・タウジヒ夫妻からの助言もあり、資金獲得の手段として支援証書（Patronatsschein）の発行を考えていた。それは、必要な費用を1枚300ターラーの支援証書を1000枚発行することで賄おうとする株式会社のアイデアである。この証書1枚につき《ニーベルングの指環》四部作の上演の3人分の席が保証された⁹。ワーグナー協会は、こうした新しい祝祭劇場の建設と音楽祭の運営資金調達というワーグナーの企図を、支援証書の購入によって支持し推進しようとした。各ワーグナー協会は会員の年会費を積み立ててこの証書購入に当て、熱心だが貧しいワーグナー愛好家に音楽祭参加の機会をあたえることを目標のひとつにしていたのである。ワーグナー本人は、この段階では市民の自発的意志による協会設立の動きに積極的に関与しようとしていない。

4. 「バイロイト後援会」(1877-82)

1876年に最初のバイロイト祝祭を終えたワーグナーは、今後の音楽祭の存続のための組織づくりに本腰を入れ始め、翌年にはライプツィヒのワーグナー協会の主導によって「バイロイト後援会 Bayreuther Patronatverein」が設立された。ワーグナーの意向と設立準備委員会のそれは必ずしも同じではなく、紆余曲折を経たのち1877年9月によりやく規約¹⁰が合意された。そこでは後援会の主要な目的の一つとして、ワーグナー作品の上演にたずさわる歌手や指揮者を教育する学校の設立と運営が挙げられている (§ 1)。また、バイロイト音楽祭の管理委員会 Verwaltungsrat がそのまま協会の理事会を構成しその運営にあたること (§ 3)、各地の支部がこの規約にもとづいて設立されるべきこと (§ 4)、年会費(一人につき最低15マルクまたは8グレン)をバイロイト本部に納めること (§ 5)、毎年9月にバイロイトで代表者会議が開かれること (§ 7) などが決められた。このバイロイト後援会の設立によって、地方の各ワーグナー協会をある程度統括する組織が誕生したわけだが、そのことは各協会の自立性を制限するよりも、かえってバイロイト祝祭劇場と音楽祭の運営に対する各協会の発言力を増す結果となった。これは以後に激しくなるワーグナー本人や身内・追隨者たちと協会との確執のもととなった。1882年10月にワーグナーの意向によりバイロイト後援会が廃止されたことも、こうした確執に起因している。

一方、ワーグナーはバイロイト後援会設立の翌年に「バイロイト新聞 Bayreuther Blätter」を創刊し、ハンス・フォン・ヴォルツォーゲンにその編集を任せた。この雑誌は1938年まで存続し、ワーグナーの思想やその右翼的解釈を世に広めるのに多大の働きをすることになる。

5. 「一般リヒャルト・ワーグナー協会」(ARWV) (1883-1938)

1882年に最後の楽劇(神聖舞台祝典劇)《パルジファル》のバイロイトでの初演を終えたワーグナーは、翌年の2月に静養先のヴェネツィアで客死する。創作者本人の死によって、ワーグナーの音楽劇と著作は全面的に残された人間たちの管理と解釈にゆだねられることになり、ここに本格的なワグネリズムが開始されると考えてよいだろう。つまり、ともかくも自分の作品を上演し世に普及させようという、作曲家なら誰でも取り組まざるをえない具体的な思惑から離れて、彼の作品は精神化され、象徴化され、時代を先導するイデオロギー的枠組みの中に組み入れられる可能性を増したのである。

ワーグナー死去からほどなく、ニュルンベルクで開かれたワーグナー協会の代表者会議で「一般リヒャルト・ワーグナー協会 Allgemeiner Richard Wagner-Verein」(以下 ARWV と略記)の設立が決定される。いよいよ後世の手にゆだねられたワーグナーの遺産(音楽作品と思想、および資産)を維持・管理し、発展させるのが目的である。ここで主導的役割をはたしたのは、ワーグナーの本拠地ミュンヘンのワーグナー協会で副会長をつとめるシュボルク伯爵であり、彼はオステニ男爵とともに初代の会長に就任する。またワーグナー協会のなかでも最も重要な役割をはたしてきたウィーンの WAWV の支援も加わった。

この協会の名称の最初に付けられている「一般 allgemein」の語は、この協会が各地方のワーグナー協会の統括組織であることを意味している。以前のバイロイト後援会は各ワーグナー協会と協力関係にあったが、基本的には別組織であった。

5.1 ARWV の組織

Veltzke によれば新しい協会の組織は次のとおりである¹¹。

ARWV の傘下にはいる地方のワーグナー協会も、基本的には独立した組織である。年会費も自由に決

められるが、ARWV に対して会員一人につき 4 マルクの年会費をおさめる義務を負う。また月刊機関誌「バイロイト新聞」の購読も義務化される。そうした地方協会の中でも会員数が20をこえるものは、支部（Zweigverein）となる権利をあたえられ、総会（Generalversammlung）に代表を送ることができる。そこでは少なくとも 3 名の役員を置き、規約を持ち、ワーグナーに関する講演、演奏会、研究会などの企画・運営を独自の立場でおこなうべき、と定められている。

ワーグナー協会の実体をなすこれらの地方支部は、各地区ごとに「地区代表部」（Ortsvertretung）によってまとめられる。ARWV の「中央委員会」（Zentralleitung）とのやりとりも主としてそこを通じておこなわれる。

中央委員会は、100人以上の会員をもつワーグナー協会の会員から選ばれた 9 人の委員から構成される。

協会の「総会」はバイロイト音楽祭のおこなわれる年ごとに開催される。各支部にはその会員数などに応じて代表委員の議席数と投票権があたえられる。

5.2 ARWV の出版物

1878年から発行されていた「バイロイト新聞」は正式に ARWV の機関誌（月刊）となり、会員は定期購読の義務を負うこととなる。またこの機関誌は希望によって会員以外の一般人も購入可能となる。編集長はいかかわらずヴォルツォーゲンがつとめた。彼は機関誌編集長として中央委員会に加わるが、それは選挙規約の適用されない例外的な立場である。

1884年からは第二の機関誌として「バイロイト小型カレンダー Bayreuther Taschenkalender」（第3巻以降は“Bayreuther Taschenbuch mit Kalendarium”と改名）が発行される（1893年まで）。これはワーグナー・サイド（親族、直属の弟子・思想家たちなど）から引き継いだ「バイロイト新聞」とちがい、ARWV 独自の編集によるいわば真の機関誌であり、ARWV の会長をつとめるシュポルク伯爵とメルツが中心となって編集された。ワーグナー協会会員の一般化・大衆化に対応して、ワーグナーの芸術や論をより平易に説く目的でつくられた。

なお中央委員会によりつくられた「バイロイト音楽祭新聞 Bayreuther Festblätter」は、1884年の音楽祭のために発行された単一の出版物である。

5.3 「リヒャルト・ワーグナー財団」の設立

ARWV の大きな課題の一つは、ワーグナーの遺産や音楽祭開催のための財務管理のための「リヒャルト・ワーグナー財団 Richard Wagner-Stiftung」の設立である。1884年に設立準備委員会がつくられて作業が始められたが、財団設立にまつわる困難は、社会的・民主的組織であるワーグナー協会と妻コジマをはじめとするワーグナーの遺産の私的な相続者たちとの立場や考え方の違いに起因するものだった。ワーグナーは生前、自分の作品の祝典上演をワーグナー協会の意向によって影響されることを嫌っていたが、彼の遺族たちも彼の遺産に他人がくちばしを差しはさむことを快く思わなかった。紆余曲折をへて翌年の4月に合意された理事会のメンバー構成では、ワーグナーの遺族側の人間が半数近くを占める結果となった。ARWV の活動におけるバイロイトの主導的役割の増大は、社会的・民主的組織としての ARWV の性格を変質させていくこととなる。

5.4 ARWV の会員数の変化

Veltke によれば¹²、ARWV の会員数（つまり、そこに属する各地のワーグナー協会の会員の総計）は、設立後1年半にしてすでに5000人を数え、1888年には6730人となって法人資格を獲得する。会員数のピー

クは翌年の1889年で8097人を記録する。こうした会員数の増加は、ワーグナー芸術への一般市民の関心の増加（ワーグナーの大衆化）と並行した現象と考えられる。その背景には、ワーグナー芸術に対する理解度の向上やその普及とともに、ドイツ民族国家主義イデオロギーとワーグナー芸術との連携があると考えられる。

しかし会員数はその後1891年を境に減り始め、1896年には3726人にまで落ち込んでしまう。これには1891年の音楽祭チケットをめぐる騒動が大きく影響している。元来 ARWV の会員は、特別に確保された音楽祭チケットや安売りチケットの恩恵にあずかってきた。またバイロイト当局にとっても、ARWV 会員は音楽祭の安定した確実な顧客として財政上重要であった。しかし音楽祭チケットに対する一般市民からの需要が著しく増大するようになると、バイロイト当局はチケット販売に関して ARWV へ依存する必要性がなくなってくる。こうした状況のもとで、1891年にチケットが大幅に不足し、多くの ARWV 会員がチケットを入手できない事態が生じた。これに対して各ワーグナー協会からバイロイト当局への非難が殺到し大混乱となった。ワーグナー芸術が一般市民に熱狂的に受け入れられる一方で、この事件を機に ARWV を去る会員が増えたのである。

6. 地方のワーグナー協会について

6.1 主要な地方ワーグナー協会

これまで述べてきたバイロイト後援会と ARWV は、ワーグナーを愛好する市民たちが自発的に設立した各地のワーグナー協会を組織化し統括する機関であった。したがって個々の地方ワーグナー協会こそ、実際に一般人たちのワーグナー受容の実態を反映する団体といえる。こうしたワーグナー協会のなかでも重要なのは、ワーグナーの熱心な愛好家が多かったウィーン、彼の生地であるライプツィヒ、彼の後半生の本拠地ミュンヘン、ドイツ帝国の首都ベルリンなどである。先の統括機関との関係でみると、ライプツィヒのワーグナー協会はバイロイト後援会の設立と規約作成において積極的な役割を演じ、ウィーンとミュンヘンのそれは ARWV 設立に主導的役割を果たした。最初ミュンヘンを本拠地とした ARWV は次第にドイツ帝国の中枢との関係強化の方向へとすすみ、ベルリン＝ポツダム・ワーグナー協会の強い働きかけによって1889年にはその中央委員会はベルリンに移される¹³。

6.2 その他の地方ワーグナー協会

ワーグナー協会には数百人の会員を擁するものから数人の会員しかないもの、また数十年活動をつづけた協会から数ヶ月しか存続しなかったものまで、さまざまな規模や寿命の協会が存在した。ARWV 設立から1年半後の1885年の時点で、支部協会（20人以上の会員をもつ地方協会）は24、その他の地方協会は380を数えた¹⁴。いかに小規模なワーグナー協会が各地に点在していたかがわかる。

同じ都市に複数のワーグナー協会が同時に存在した例も多い。後で述べるように、ウィーンでは WAWV のほかに、最初のバイロイト音楽祭支援を目的とする協会（1872-6）があったし、会員からユダヤ人を排除した反ユダヤ的・民族主義的な協会（1889年設立）もつくられた。ベルリンでは貴族や有名人たちの多くが加入した前述のベルリン＝ポツダム・ワーグナー協会と時期を同じくして、アカデミック・ワーグナー協会（Akademischer Wagnerverein）があり、ミュンヘンでも主要な協会のほかに同じくアカデミック・ワーグナー協会や「聖杯結社 Orden vom hl. Gral」が活動していた。

「アカデミック akademisch」のタイトルをもつ協会は、一般に学生や大学関係者を主とする小規模で短命の団体である。たとえばライプツィヒでは1880年に設立された協会は一年で解消し、1883年設立の協会

も同じく一年の寿命であったが、1887年設立の協会はより長く存続した。マールブルクに1885年に設立された協会は最初一桁の会員しか持たなかったが、やがて会員も増えて1896年まで存続した。もっとも、多くの会員を擁して65年にもわたって活発な活動をおこなった WAWV は例外である。

次に、ワーグナー協会の理念と活動についてより詳しく考察するために、一例としてこの WAWV をとりあげてみたい。この協会は、数多くのワーグナー協会のなかでも歴史が古く、ワーグナー協会全般において指導的役割を果たしてきたが、それはまた他の多くのワーグナー協会がもっていた目標、性格、諸問題をも共有していた。

7. 「ウィーン・アカデミック・ワーグナー協会」(WAWV) にみるワーグナー協会の諸側面

7.1 当協会の設立とその目的

音楽的にみて保守的傾向の強いウィーンは、実は多くの熱心なワグネリアンの住む都市でもあった。1871年のワーグナーによる資金援助の呼びかけに反応して、この年の11月には最初の音楽祭を成功させるべく支援を目的とするワーグナー協会がつくられる。このワーグナー協会は1876年の音楽祭が実現した折に解散している。しかしこのワーグナー協会設立と並行して別のワーグナー協会の設立準備がすすんでいた。これこそ1938年まで存続しワーグナー受容やウィーンの文化活動の上で重要な役割を果たすことになる「ウィーン・アカデミック・ワーグナー協会 Wiener Akademischer Richard Wagner-Verein」(=WAWV)である。

ここで使われている「アカデミック」(akademisch)の形容詞は、この語を冠した他の協会の例とは異なっている。この協会の最初の年報の説明によれば、「この名称が選ばれた理由は、その設立者のなかに幾人かの大学人がふくまれていたことのほか、それによってすでに存在している『ウィーン・ワーグナー協会』と簡単に区別がつくからである」。同じくこの年報によれば、この協会の目的のひとつは「『音楽とドラマ』で説かれたワーグナーの改革理念を広める」ことである¹⁵。この目的のためにワーグナー関連の音楽会や講演会などの催しがおこなわれるとともに、大学の「読書クラブ Leseverein」¹⁶などの関連団体とも協力関係を結んだ。毎年発行される「年報 Jahresbericht」も単なる活動報告をこえた啓蒙的内容を含み、後に「パイロイト新聞」が発行されるまでの唯一のワーグナー会報として、この作曲家の作品や思想の理解と普及に貢献した。

また重要な目的として、祝祭劇場建設資金と音楽祭開催費用の支援はもちろんのこと、さらに「この国民的祝祭を積極的に支援するように全国民を促す」¹⁷ことが強調されている。

1877年にパイロイト後援会が設立されると、そこで目的とされているワーグナー作品にふさわしい様式による模範的上演を可能とする芸術家の養成学校への協力、新作《パルジファル》上演に向けた支援などを加えた規約の改定がおこなわれた。また1883年のワーグナー死去と ARWV 設立に対応して、「最も純粋な様式をもつ音楽劇の模範的上演をおこなうドイツの芸術的本拠地としてのパイロイト祝祭劇場を、ARWV とともに未来にわたって守ってゆく」こと、そして「無料席や旅行補助金をあたえることにより、協会会員、貧しい芸術家、芸術家の卵、芸術愛好家などが音楽祭に行きやすくする」ことを規約に明記している¹⁸。

7.2 会員構成について

WAWV の初期段階には、この協会の設立時前後から活発な活動を開始したウィーン大学の有志学生による「ペルナーシュトルファー・サークル」のメンバーの多くがそこに加入した¹⁹。彼らはすでに世紀末

的状况を見通していたかのような先取的認識をもって、当時のオーストリアの政治、経済、文化においても主流をなしていた自由主義に疑問をいだき、資本主義に対して社会主義、国際主義（もしくは多民族主義）に対してドイツ民族主義、個人主義（利己主義）に対して博愛主義、合理主義（唯物論）に対して精神主義（心情主義）を主張した。1873年の大恐慌と自由主義の政治的敗退によって彼らの主張がいっそう勢いづくのは言うまでもない。彼らはこれらの要素を併せ持っているワーグナーの芸術や思想²⁰、ショペンハウアーやニーチェの哲学などに強い共感を示した。

このサークルのメンバーで、ヴィクトル・アードラーとエンゲルベルト・ペルナーシュトルファーはのちに社会民主党を率いる有力な社会主義政治家となり、リヒャルト・フォン・クラリクはやがてカトリックの精神主義へと向かう。ジークフリート・リピナーは劇作家として一時ニーチェとワーグナーから注目されるが、やはり強い精神主義的志向をもち、作曲家マーラーの親しい友人として彼の世界観に多大な影響をあたえた。

このサークルは、世紀末の時代に明確なかたちをとる、時には相対立するようなさまざまな政治的、文化的、思想的諸傾向を萌芽として包含していた。そのことは、彼らが加入した WAWV についても当てはまる。ワーグナー芸術は、芸術であるがゆえに、種々のイデオロギーや彼自身の思想もふくめた視野の狭い、一面的な主義・主張を超えた懐の深さをもっており、それに応じてワーグナー協会のメンバーの立場やものの見方も多種多様であった²¹。

次に WAWV のもつ主な傾向と問題性について考察してみたい。

7.3 ドイツ民族主義運動（Deutschnationale Bewegung）とのかかわり²²

オーストリア＝ハンガリー帝国は多民族国家であるが、歴史的にドイツ民族が政治的にも文化的にも主導的立場にあった。このドイツ人たちは、1871年に成立したドイツ帝国から排除された立場であればなおのこと、ドイツ文化の優秀さとドイツ民族の政治的優位性を主張する傾向が強く、さらに全ドイツ民族による単一国家建設をめざす人々も多かった。ドイツ国家主義は、ドイツ人であればその人が自由主義でも社会主義でも、容易に受け入れることができたし、そのことはドイツ文化に興味と共感を寄せる知的ユダヤ人についても同様であった。それは、ドイツ民族主義色の濃い「リンツ綱領」（1882）にユダヤ人社会主義者アードラーが積極的に関与していた例にも示されている。

ドイツ文化は、性急な近代化で無視されるようになった精神的価値を代表していた。またそうしたドイツ文化と結びついてきた社会の諸制度や慣習は、経済発展に伴う自由主義的諸改革で消滅の憂き目に会っていたから、旧制度に立脚する保守層（貴族、カトリック聖職者、農民など）にとってドイツ民族主義は頼りがいのあるイデオロギーとして機能した。シェーネラー、ルエーガーといったこの時代を代表する民族主義的／反ユダヤ主義的政治家は、こうした復古主義、民族主義に近代化の展望も混ぜ合わせて人々を扇動した²³。

WAWV は設立当初からワーグナー芸術をドイツ民族主義とむすびつけ、前述のようにバイロイト音楽祭という「国民的祝祭を積極的に支援するように全国民を促す」ことをその目的に掲げていた。このような結び付けは、ウィーンでは当のドイツよりも時期的に早くまた強いものであり、この点でドイツのワーグナー協会を先導した面もある。

オーストリアの民族主義者たちがワーグナーに託する想いがよく現れているのは、彼の死去をうけて1883年3月にとりおこなわれた追悼行事であろう。3月5日におこなわれた集会は、各地の大学の学生組合やそれらの連合組織が企画したもので、当時ウィーン大学の学生であった若いヘルマン・パールもドイツ民族主義的、反ユダヤ的な煽動的演説をぶった、とされている。また当時学生の間で絶大な人気を誇っ

た急進的ドイツ民族主義者ゲオルク＝リッター＝フォン＝シェーネラーが飛び入りで違法な演説をおこなったことが知られている²⁴。

しかしこうした世情にもかかわらず、それより4日前におこなわれたWAWV主催の追悼集会は、できるかぎり政治色を排除した、追悼にふさわしい厳肅な雰囲気の中で進行し、そのとき演奏されたエロイカ交響曲や《神々のたそがれ》の葬送行進曲のあとも拍手の自制が要求されたという²⁵。このことは、音楽愛好者団体としてのWAWVの性格をよくあらわしている。当時のWAWVの会員（あるいは少なくともその指導部）はドイツ民族主義イデオロギーの危険を察知していたようだし、会員の中の多くのユダヤ人の存在に配慮する必要もあったろう。先のシェーネラーや後にウィーン市長となる反ユダヤ主義者カール・ルエガーがWAWVの会員であった記録はなく、その年報にも彼らへの言及はないという²⁶。

7.4 WAWVとユダヤ人

19世紀後半になるとオーストリアでは、自由主義的施政に導かれて産業革命と経済発展が進行した。ここで企業家、銀行家としてこの産業発展を牽引した多くは、ようやく長い差別的桎梏から開放されたばかりのユダヤ人であった。労働者としてあとから帝国周辺地域から続々とウィーンにやってくるユダヤ人とは違い、彼らは自由主義的保守層を形成するが、彼らの子の世代は、ウィーン証券取引所の株価下落に端を発した大恐慌とそれに伴う自由主義路線の破綻を経験したこともあって、その関心を文化に向ける傾向があった。こうして文化の領域で名をあげたユダヤ人知識人は、カフカ（作家）、フロイト（心理学者）、ヴィットゲンシュタイン（哲学者）、G. アードラー（音楽史家）、マーラー（作曲家）、シェーンベルク（同）など、枚挙にいとまない。彼らはドイツ語によるドイツ文化的環境で育ち、ドイツ文化の（あるいはドイツ文化を引き継いだ）領域で天才的偉業を成し遂げたのである。

こうしたユダヤ人はなかばドイツ人であり、彼らのなかではドイツ民族主義に肩入れした者も多くいたが、一方、ユダヤ人に対しては伝統的な差別意識に加えて、忌むべき近代化の元凶という新たな意味付けがなされ、また人種の反ユダヤ主義思想もあらわれて、世紀末にむけて反ユダヤ主義は激しさを増していった。先に述べたドイツ民族主義運動は、反ユダヤ主義と表裏一体となって展開したが、そのことがドイツにおいてもオーストリアにおいてもこの時代のユダヤ人の立場を矛盾にみちたものになっている。それは音楽の領域でも同様であり、とりわけドイツ民族主義と反ユダヤ主義を標榜するワーグナーをとりまく状況は、ユダヤ人にとって複雑とならざるをえない。

音楽家や音楽関係者にもワーグナーの芸術に共感し思想を信奉するユダヤ人が数多くいた。ワーグナーの私的な、また仕事上の交友相手にも、カール・タウジヒ、アンジェロ・ノイマン、ヘルマン・レヴィなどのユダヤ人がいたが、そのワーグナーは自由主義的な革命家として活動していた頃もふくめて、ユダヤ人に対する否定的、敵対的な感情をもっていた。1870年代後半にプロイセンの牧師シュテッカーによって本格的な反ユダヤ運動（「ベルリン運動」）が開始されるはるか以前の1850年に、彼は匿名で反ユダヤ的論文『音楽におけるユダヤ性について』を公けにした（1869年に実名で改訂版を出版）。かれはその後、シュテッカーはもとよりマルやラгалド、そしてフランスのゴビノーらの著作をことごとく読んで共感を示している。また反ユダヤの煽動家ベルンハルト・フェルスターは熱烈なニーチェとワーグナーの信奉者であったし、反ユダヤ主義者として広範な影響力をもったチェンバレンはワーグナーの娘婿となる。

こうした状況においても、一般のワーグナー協会のユダヤ人に対するスタンスは概して良識的なものであった。その一例として、最後にWAWVとマーラーの関係を考察しておく。

ユダヤ人作曲家マーラーは1885年前後の短い時期にWAWVの会員だった記録がある。ワーグナーから多大の影響を受け、オペラ指揮者・監督としてワーグナー上演に取り組んだマーラーを、WAWVが支援

しようとした記録はない。それはワグナーの死後に彼を引き継ぐ直系の音楽家としてブルックナーとヴォルフを熱心に支援したのと対照的である。しかし、このマーラーがウィーン宮廷歌劇場の指揮者／音楽監督に就任するに際して、WAWV は歓迎の意を明らかにしている²⁷。

反ユダヤ主義の運動も高揚してきた1889年に、ユダヤ人の存在を嫌った一部のワグネリアンたちは WAWV と袂を分けてユダヤ人を排除した新しいワグナー協会をつくる²⁸。ベルリンで2年前に新たにつくられたアカデミック・ワグナー協会がキリスト教徒のみを会員として認め、ユダヤ教徒を排除した²⁹ こととも並行した現象であろう。

J.Deaville は WAWV に関する論文のなかで、この団体の性格について適切にも次のように書いている³⁰。

「このグループは自身の活動方針というものをもってはいたが、その第一の関心事は芸術的事柄であり、さらにアカデミックなエリート集団として、それは、他のドイツ民族主義的諸集団がおかした「行き過ぎ」を許さないだけの体面をたもち続けたように思われる。」

8. まとめ

しばしばワグネリズムと呼ばれているワグナー受容は、彼の作品(音楽劇)ばかりでなくその音楽論、文化論、政治・社会論、宗教論などをもとに、19世紀後半のドイツやオーストリアの民族主義的(völkisch)な政治的・社会的思潮の影響下で形成された。ワグナーの生前と死後におけるこうしたワグネリズム形成にかかわったひとつの重要な組織がワグナー協会である。ワグナー協会は、ワグナーの音楽劇や思想に共鳴した人たちが、その普及活動とバイロイト音楽祭支援の目的でつくった自主組織であり、作曲家自身のイニシャティヴによるものではなかった。最初のバイロイト音楽祭の後、各地に存在していた少なからぬ数のワグナー協会を統括しつつ音楽祭の維持と発展を期する目的で「バイロイト後援会」が設立される。その後のワグナー受容を主導することになる、ヴォルツォーゲン編集による通信誌「バイロイト新聞」もこの時期に創刊される。ワグナー死後には、同じく音楽祭の維持・発展のほか彼の遺産の継承という課題にも取り組むことを目的とする「一般リヒャルツ・ワグナー協会」が設立され、各地のワグナー協会も組み入れたワグナーの受容組織ができあがる。しかし、ワグナー音楽の愛好者を主体とする各地のワグナー協会とワグナー本人やその身内や取り巻きなどによるバイロイト・サイドの意向はかならずしも同じではなく、両者はしばしばワグナー協会の活動方針や運営方法をめぐって対立した。後者はワグナー芸術の普及と音楽祭の維持・発展のため、当時ますます勢力を増しつつあったドイツ民族主義に積極的に加担しようとし、またワグナーがもともと持っていた反ユダヤ主義への傾向を強めていったのに対し、前者は、「ウィーン・アカデミック・ワグナー協会」の例にもみられるように、ワグナー芸術の幅広い愛好者層からなっており、彼らは過激なドイツ民族主義運動とも距離を置き、ユダヤ人をいたずらに排除することなく、文化的集団としての良識を持続けた。ワグナーの楽劇が一般に人気を博するようになった90年代になると、バイロイト・サイドはこれまで音楽祭の顧客として音楽祭を支えてきたワグナー協会会員たちから離れていき、保守化の傾向を強め、より権力者寄りの政策をとるようになる。その結果、生前のワグナーの活動を支持し、作曲家死後のバイロイトを支え続けたワグナー協会の規模と活動は、急速に衰えていった。

引用文献

- Deaville, James. 1999. Die Wacht an der Donau!?! The Wiener Akademischer Wagner-Verein, Wiener Moderne and Pan-Germanism. In: Wien 1897: Kulturgeschichtliches Profil eines Epochenjahres, hrsg. von Christian Glanz, Frankfurt/M., pp.49-84.

- Hanisch, Ernst. 1986. Die politisch-ideologische Wirkung und “Verwendung” Wagners. In: Richard-Wagner-Handbuch hrsg. von Ulrich Müller und Peter Wapnewski, Stuttgart, pp.625-646.
- Koppen, Erwin. 1986. Der Wagnerismus-Begriff und Phänomen. In: Richard-Wagner-Handbuch hrsg. von Ulrich Müller und Peter Wapnewski, Stuttgart, pp.609-624.
- Kowar, Helmut. 1986. Vereine für die Neudeutschen in Wien. In: Bruckner, Wagner, und die Neudeutschen in Österreich: im Rahmen des Internationalen Brucknerfestes Linz 1984. 20.-23. September 1984, hrsg. von Othmar Wessely, S.81-90.
- Large, David C.. 1984. Wagner's Bayreuth Disciples. In: Wagnerism in european culture and politics, ed. by D.Large and W.Weber, Ithaca & London : Cornell University Press, pp.72-133.
- McGrath, William J.. 1974. Dionysian art and populist politics in Austria. New Haven: Yale University Press.
- Salmi, Hannu. 2005. Wagner and Wagnerism in Nineteenth-Century Sweden, Finland, and the Baltic Provinces. Reception, Enthusiasm, Cult. (Eastman Studies in Music) New York: University of Rochester Press.
- Veltzke, Veit. 1987. Vom Patron zum Paladin: Wagnervereinigungen im Kaiserreich von der Reichsgründung bis zur Jahrhundertwende. (Bochumer historische Studien: Neuere Geschichte Vol.5), Bochum: Brockmeyer.
- Veltzke, Veit. 2002. Der Mythos des Erlösers - Richard Wagners Traumwelten und die deutsche Gesellschaft 1871-1918. Stuttgart: Arnoldsche. (特に pp.95-140 “Die organisierte Wagnerbewegung: Verein oder Gemeinde?”)
- Wagner, Richard. Ankündigung der Festspile (12. Mai 1871). In: Sämtliche Schriften und Dichtungen Bd.16, Leipzig 1911, p.131f.
- Wagner, Richard. Aufforderung zur Erwerbung von Patronatsscheinen (18. Mai 1871). In: Sämtliche Schriften und Dichtungen, Leipzig 1911, Bd.16, p.132f.
- ヴェステルンハーゲン 1973「ワグナー」三光長治・高辻知義訳白水社
- 高野茂 2005「19世紀末ウィーンにおける音楽と政治 ブラームス派とブルックナー派の対立をめぐって」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第10集第1号 pp.57-65
- 田村栄子 1996「若き教養市民層とナチズム」名古屋大学出版会

註

- ¹ E.Koppen (1986, p.609) は、ワグネリズムの概念の要点を次の3点に集約している。
 1. 音楽そのものにはあまり関心を向けないワグナー受容の特殊なあり方
 2. ささまざまな文学的、文化的、政治・社会的思潮それぞれに都合のよい、恣意的ともいえるワグナー解釈
 3. 第一次世界大戦までの期間におけるワグナー受容
 「ワグネリズム」には事実、こうした意味合いがふくまれており、一般的なワグナー受容とは区別されるべきであるが、本稿の扱う19世紀後半のワグナー受容には、こうしたワグネリズム的色彩が濃厚である。
- ² 19世紀後半のウィーンの音楽文化において、「保守派」とされるブラームスを進歩的自由主義に、WAWVに支援されたヴォルフやブルックナーたちを復古的・大衆的な民族主義に、政治的に関係づけることは、ある程度可能であろう。この問題に関して、筆者は論文「19世紀末ウィーンにおける音楽と政治」(高野茂 2005)において論じた。
- ³ この時代のドイツ帝国における「民族主義運動」は一般に“Völkische Bewegung”の語で表現され、オーストリア＝ハンガリー帝国のそれは“Deutschnationale Bewegung (Deutsch-Nationale Bewegung)”と表現されるのが慣例である。
- ⁴ 田村栄子はその意味内容の違いによってこの語を「庶民」、「民衆」、「民族」、「国民」、「臣民」、「人民」というように訳し分けている。(田村栄子 1996, p.24)。
- ⁵ ウィーン大学学生有志による知的グループ。後に教育者、社会民主党の政治家となるエンゲルベルト・ペルナーシュトルファーがそこで主導的役割をはたしたことからこう呼ばれる。メンバーはほかに、のちに社会民主党をつくったヴィクトル・アードラー、一時ニーチェの関心を惹いた詩人で音楽家マーラーの友人であったジークフリート・リビナー、作家となるリヒャルト・フォン・クラリクらがいる。
- ⁶ McGrath 1974, p.5を参照。1873年のウィーン証券取引所の株式大暴落に象徴されるような急速な近代化の弊害があらわれはじめたオーストリアにおいては、近代化からとり残されたさまざまな旧勢力(手工業者、土地所有者、キリスト教聖職者など)、新しく形成された労働者勢力、帝国内の多くの少数民族、近代化の元凶とみなされたユダヤ人の排斥論者たちのような、近代化に対する批判勢力が優勢となったが、彼らは“völkisch”なもの(民族、国民、大衆・・・)を共通理念としていたといえる。したがってその政治も、彼らの主張に配慮したいわゆる人民主義 populism を基本とする政策をおこなう傾向が強まったのである。
- ⁷ ヴェステルンハーゲン 1975, p.556; Veltzke 2002, p.96.

- ⁸ このアピール文は、ワーグナーが《ニーベルングの指環》の上演とワーグナー協会設立までの経緯について書いた「最終報告」のなかで引用されている。R.Wagner: *Sämtliche Schriften und Dichtungen*, Bd. 9, S. 314-318.
- ⁹ Wagner: „Aufforderung zur Erwerbung von Patronatsscheinen” (18. Mai 1871) (*Sämtliche Schriften und Dichtungen* Bd.16, S.132); Salmi 2005, p.207; Veltzke 2002, 97f.
- ¹⁰ この規約は、Veltzke (1987, 152f.) に掲載されている。
- ¹¹ Veltzke 1987, p.324ff.
- ¹² Ibid., p.341, p.359.
- ¹³ Ibid., p.334.
- ¹⁴ Ibid., p.341.
- ¹⁵ Kowar 1986, p.82.
- ¹⁶ この団体の主要な構成員はベルナーシュトルファー・サークルのメンバーたちである。
- ¹⁷ Kowar 1986, p.82.
- ¹⁸ Ibid., p.83.
- ¹⁹ この団体についての詳細は Macgrath (1974) により明らかにされている。
- ²⁰ ベルナーシュトルファーはワーグナーの社会主義的解釈を試み、のちのバーナード・ショウらの社会主義的ワーグナー解釈の先駆けとなった。(Hanisch 1986, p.637)
- ²¹ WAWV の会員構成については J.Deaville の研究 (Deaville 1999, p.56f.) に詳しい。
- ²² 以下に述べる19世紀末オーストリアの政治状況については拙論文 (高野茂 2005) で詳しく述べたが、参考にした主な文献は以下の通りである。今来陸郎(編)「中欧史 世界万国史 7」(山川出版社 1970)、南塚信吾(編)「ドナウ・ヨーロッパ史 新版世界万国史 19」(山川出版社 1999)、カール・ショースキー「世紀末ウィーン 政治と文化」(安井琢磨訳 岩波書店1983)；村田雅人「反ユダヤ主義—世紀末ウィーンの政治と文化」(講談社 1995)、ヘンリー A. リー「異邦人マーラー」(渡辺裕訳 音楽之友社 1987)。
- ²³ ショースキー (1983) は彼らの政治思想を、「イデオロギー的なコラージュ—近代性の断片、未来の瞥見、半ば忘れられた過去の更生された遺物から成るコラージュ」(p.155) と表現している。
- ²⁴ Deaville 1999, p. 67.
- ²⁵ Ibid., p. 66.
- ²⁶ Ibid., p. 57.
- ²⁷ Ibid., p. 69.
- ²⁸ L.Botstein:Gustav Mahler's Vienna, p. 20
- ²⁹ Veltzke 1987, p. 336.
- ³⁰ Deaville 1999, p. 57.